

庄内町の住民と岩手大がまちあるきでハザードマップを作成（速報版）

庄内町と岩手大学、新庄河川事務所では、昨今の土砂災害発生状況等を鑑み警戒避難の強化に向けて「まるごと里ごとハザードマップ」（仮称）を作成します。8月22日（月）にハザードマップ作成に向けた住民説明会を開催しました（住民参加者数：10名）。



説明会開催状況



説明会開催状況



岩手大学 井良沢教授の説明



岩手大学 生徒によるアンケートの説明

災害対策 大学も協力

独自のハザードマップ作成へ

町会
内明
庄説

集中豪雨による土砂災害を受け、住民と官・学が連携し、オリジナルのハザードマップを作成する全国初の事業が、庄内町木の沢地区で始まる。住民と国土交通省新庄河川事務所、岩手大の事業。住民説明会が22日夜、同地区の和郷会館で開かれた。



住民と官・学連携のハザードマップ作りに向け開かれた住民説明会
|| 庄内町・和郷会館

住民と官によるハザードマップ作りは他地域でも行われているが、大学が参画するのは全国初。同事務所が主体となり、地域と協働した防災力向上に関する研究に取り組む岩手大農学部の井良沢道也教授とゼミ学

生の協力を得た。この体制で▽暮らしているからこそ分かる住民の情報▽井良沢教授の専門的視点▽学生による住民に伝わりやすい表現—をマップに反映させる。

同地区を含む立谷沢川流域は崩壊地や地滑り地が多数存在。1937(昭和12)年に立谷沢川の国直轄砂防事業に着手してから来年で80年の節目を迎えることから、同地区が実施地域に選ばれた。

説明会には住民10人が出席。同事務所、同大の担当者、大蔵村肘折地区の斜面崩落など近隣で発生した土砂災害の事例や、自助・共助力を高めることなどを

目的にした事業の趣旨を解説した。

今後は、庄内町が作成したハザードマップなどをたたき台に、9月17日に住民と学生が地区内を歩いて土石流の危険地域や避難路を確認しながら現地情報を収集。10月に図上検討会を開く。来年度にオリジナルのハザードマップをまとめ、住民に配布。検証訓練と見直しも行う。